教育研究業績書

2026年11月06日

所属： 看護学科　　資格： 講師　　氏名： 菅　彩香

研究分野	研究内容のキーワード
高齢者看護学,基礎看護学	高齢者,転倒,リスク評価
学位	最終学歴
博士（保健学）	大阪大学大学院 医学系研究科保健学専攻 博士後期課程

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
1.看護教育特講Ⅰ（博士前期課程）（神戸大学）	2024年4月～2026年3月	看護職の教育的役割を理解する本科目において、「看護基礎教育の実際」の講義を担当し、実習指導の具体的展開について理論と実例を交えた講義を行った。
2.実践看護学特別研究Ⅰ（博士前期課程）（神戸大学）	2022年4月～2026年3月	実践看護学の課題に基づき学生が研究テーマを設定し、研究を遂行する本科目において、ゼミでの研究ディスカッションを促進し、研究成果報告の作成や発表の補助を行った。
3.実践看護学演習Ⅱ（博士後期課程）（神戸大学）	2022年4月～2026年3月	実践看護学の課題に基づき学生が研究テーマを設定し、研究を遂行する本科目において、ゼミでの研究ディスカッションを促進し、研究成果報告の作成や発表の補助を行った。
4.ひとと生活（神戸大学）	2022年4月～2025年3月	ひとと生活の相互作用を理解し、看護の役割を学ぶ本科目において「ひとの生活行動と看護（排泄）」の講義を担当し、排泄の意義や意味を生活行動との関連から理解を深める講義を行った。
5.IPW統合演習（神戸大学）	2021年7月～2026年3月	Interprofessional Work（IPW）の総合的な力をつけ、異なるメンバーの連携・相互理解を促すことを目的とした本科目において、事例を用いたグループディスカッションにおけるチュートリアルを担当した。
6.症状マネージメント論（神戸大学）	2021年4月～2026年3月	疾患に関連する様々な症状がひとや生活に与える影響を踏まえた看護について理解する本科目において「ショック・出血、脱水・浮腫」「腹痛・悪心・嘔吐」の講義を担当した。
7.実践看護学演習Ⅰ（博士前期課程）（神戸大学）	2021年4月～2026年3月	実践看護学の課題に基づき学生が研究テーマを設定し、研究を遂行する本科目において、ゼミでの研究ディスカッションを促進し、研究成果報告の作成や発表の補助を行った。
8.卒業研究（神戸大学）	2020年7月～2026年3月	2020年度は副指導で3名、2021年度は副指導で6名、2022年度は主指導で2名、2023年度は主指導で3名、2024年度は主指導で3名、2025年度は主指導で3名、2026年度は主指導で3名の卒業研究を指導した。主な研究テーマは、ナースコール履歴の分析、看護師の動線の可視化、移乗や洗髪などの看護技術の検討、在宅介護の継続要因の探索、高齢者の健康指標と関連要因の探索などである。
9.初期体験実習（神戸大学）	2020年7月～2026年3月	ヒューマンケアリング、生命・医療倫理を体験的に学ぶ本科目において、見学実習での学びを統合することを目的としたグループディスカッションにおけるチュートリアルを担当した。
10.看護実践基盤実習（生活援助）（神戸大学）	2020年7月～2026年3月	患者が体験している療養生活上の困難や苦痛を理解し援助過程の展開を行う本科目において、病棟実習全般の指導を行った。
11.看護実践基盤実習（援助関係）（神戸大学）	2020年7月～2026年3月	患者との関わりを通して、自己理解・他者理解を進め援助関係に対する理解を深める本科目において、病棟実習全般の指導を担当した。
12.看護援助論（神戸大学）	2020年7月～2026年3月	専門職としての、援助場面におけるコミュニケーションの基礎を学ぶ本科目において、より実践的な場面をとおした体験学習を促すロールプレイ演習の指導を担当した。
13.治療援助技術演習（神戸大学）	2020年7月～2026年3月	治療援助技術の知識・技術の習得を目指す本科目にお

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
		いて、演習全般の指導を担当した。また、「薬物療法総論」「注射法」「導尿法」では主担当として指導を行った。
14.援助過程論（神戸大学）	2020年7月～2026年3月	事例を用いて看護展開の一連の思考過程を学ぶ本科目において、ゴードンを用いた情報の整理、関連図作成、看護問題・看護目標の設定、看護計画の立案までを実践するグループワークのチュートリアルを担当した。
15.感染看護論（神戸大学）	2020年7月～2026年3月	感染予防に関する知識・技術の習得を目指す本科目において、「医療関連感染症」の講義を担当した。また、「衛生的手洗い」「感染予防具の取り扱い」に関する演習指導を担当した。
16.研究ゼミナール（神戸大学）	2020年7月～2026年3月	看護学における研究基礎力の習得を目指す本科目において、「生活援助技術に関わる文献検索」の講義・演習を担当した。
17.フィジカルアセスメント演習（神戸大学）	2020年7月～2026年3月	ひとを全人的に把握・理解することを目的とした身体観察技術習得目指す本科目において、演習全般の補助を行った。
18.リフレクション演習（神戸大学）	2020年7月～2021年3月	看護実践能力の獲得に必要なリフレクションのスキルの習得を目指す本科目において、グループディスカッションにおけるチュートリアルを担当した。
19.生活援助技術演習（神戸大学）	2020年7月2026年3月	生活援助技術の知識・技術の習得を目指す本科目において、演習全般の指導を担当した。また、「ベッドメーキング」「シーツ交換」「寝衣交換」「排泄援助」「オムツ交換」「陰部洗浄」では主担当として指導を行った。
20.統合看護実習（基礎看護学分野）（神戸大学）	2020年7月2026年3月	看護の学びを統合し、自律的に行動できる看護実践者の育成を目指す本科目において、専門看護師・認定看護師への随行実習や、病棟での複数受け持ち実習など、実習先般の指導を担当した。
2 作成した教科書、教材		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1.大阪大学　ティーチング・アシスタント	2020年5月～2020年6月	大阪大学医学部保健学科看護学専攻の基礎看護学分野において、学部学生および博士前期課程の学生の研究指導のサポートを行った。
2.堺看護専門学校　講師　（担当科目：情報科学）	2020年4月～2020年5月	情報科学における、個人情報の適切な取り扱いやコンピュータの基本操作、Word・PowerPointを用いた資料作成方法について、演習を交えた講義を実施した。
3.光華女子学園看護科　非常勤実習助手	2019年8月28日～2019年11月26日	光華女子学園看護学科の成人看護学分野の臨地実習において、臨地実習指導を行った。
4.大阪大学　ティーチング・アシスタント	2019年5月～2020年3月	大阪大学医学部保健学科看護学専攻の基礎看護学分野において、学部学生および博士前期課程の学生の研究指導のサポートを行った。
5.大阪大学　ティーチング・アシスタント	2015年6月～2015年12月	大阪大学医学部保健学科看護学専攻の老年看護学分野の臨地実習において、実習指導のサポートを行った。
6.大阪大学　ティーチング・アシスタント	2014年10月～2015年2月	大阪大学医学部保健学科看護学専攻の老年看護学分野の臨地実習において、実習指導のサポートを行った。
4 その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1.保健師免許	2014年4月23日	第238300号
2.看護師免許	2014年4月23日	第1766215号
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1.神戸大学大学院保健学研究科看護学領域実践看護学	2020年7月～2026年3月	上述の講義・実習以外に、卒業研究委員会（2020年度

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
分野　助教		－2024年度）、実習委員会（2021年度－2025年度）、入試委員会（2025年度）、アジア健康科学フロンティアセンター委員会（2025年度）の委員を務めた。特に実習委員会では、神戸大学医学部付属病院内の保健学科学生控室の移転に伴う、連絡調整、備品管理、レイアウト検討など実務全般を担当した。 入試業務として、大学院入試、大学入試共通テスト、前期入試、後期入試の試験監督と警備を行った。 臨床補助業務として、インフルエンザワクチン接種補助業務（2020年度、2023年度）、コロナワクチン接種補助業務（2021年度）、患者支援センターでの入院受付業務の補助（2021年度）を行った。
2.大阪大学　リサーチ・アシスタント	2020年5月～2020年6月	大阪大学医学部保健学科看護学専攻の基礎看護学分野において、研究に係る文献検索、データ収集、データ整理、データ解析などの研究の補助を行った。
3.大阪府立大学　非常勤研究員	2019年11月28日～2020年6月30日	大阪府立大学の基礎看護学分野において、研究に係る文献検索、データ整理、データ解析などの研究の補助を行った。教育面では、講義資料作成に関わる情報収集や内容整理を行い、円滑な講義運営を支援した。
4.大阪大学　リサーチ・アシスタント	2019年5月～2020年3月	大阪大学医学部保健学科看護学専攻の基礎看護学分野において、研究に係る文献検索、データ収集、データ整理、データ解析などの研究の補助を行った。
5.大阪大学医学部付属病院　看護師　（東8階病棟：神経内科、老年・高血圧内科、皮膚科）	2016年4月2019年3月	主に脳血管疾患の慢性期や神経難病、認知症などの患者への看護実践に携わった。
4 その他		
1.The Study Program for Students from Taipei Medical University	2023年4月～2025年3月	台北医学大学、香港大学などの学部生4人程度を対象とした2週間の短期留学プログラムにて、日本の看護教育を紹介する講義と体験型学習を企画・実施した。コロナ前後の看護教育の変遷や、教育用シミュレーターを用いた体験学習を通して、国際的な看護教育の交流に貢献した。
2.第11回看護理工学会学術集会　運営委員	2022年7月～2023年6月	役割：会計委員、統括長補佐 関係法令の調査および、必要な手続の実施、全体スケジュールの調整・進捗管理、演者・参加者との調整、広報、スポンサー対応、当日運営、会計管理など学術集会全般の運営をサポートした。学会運営会社を介さずに、限られたリソース下で、円滑かつ質の高い学術集会の運営を実現し、学術交流の活性化に貢献した。
3.Disaster Recovery Institute (DRI)ジャパン Associate Business Continuity Professional認定講義 受講	2019年9月	DRI International認定の事業継続の講義・試験を受講しAssociate Business Continuity Professionalの認定を受け、事業継続[Business Continuity Plan (BCP)]の体系的知識を学んだ。緊急時のリスク管理や安全性確保の観点から、医療活動・研究活動における継続可能な実践・研究活動への応用を学んだ。
4.Taipei Medical University 国際交流プログラム ボランティア	2015年8月	大阪大学保健学科にて1か月間実施されたTaipei Medical Universityとの国際交流プログラムにおいて、施設見学や大学講義全般における案内・通訳などのボランティアを担当した。国際交流におけるコミュニケーションや相互理解の重要性・実際を学び、国際的な視野と多様な価値観への柔軟な対応力を培った。
5.Comprehensive Systematic Review Training Program (CSRTP)受講	2015年3月	Joanna Briggs Institute (JBI)認定のシステマティックレビュー講習会の受講を行い、量的研究のシステマティックレビュー作成プロセス、国際標準の文献検索・分析スキルを体系的に学習した。
6.Taipei Medical University 国際交流プログラム 参加	2015年3月	Taipei Medical Universityにおいて実施された2週間の研修プログラムに参加し、台湾の大学・大学院における看護教育の現場や医療機関を見学し、現地学生との交流を通して医療・看護の多様な視点や文化的背景を学んだ。
7.神戸大学高等学術研究院　健康長寿研究拠点 令和6	2014年12月～2026年3月	高齢者の移動能力を筋力と皮膚感覚の両面から評価す

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
4 その他		
年度高等学術研究院テニュアトラック教員支援制度(B)制度		る先進的な研究に取り組み、企業と連携して再現性の高い皮膚感覚計測技術を開発してきた。これにより、非専門家でも高齢者の身体状態を可視化可能とし、看護・工学の学際連携や社会実装を推進している。高齢者の健康寿命延伸に貢献する本研究は国際的にも先進性が高く、健康長寿研究拠点に資するものとして推薦された。
8.University of Oulu 国際交流プログラム 参加	2014年9月	大阪大学保健学科にて1週間実施されたUniversity of Ouluとの国際交流プログラムに参加し、研究発表会を通して、英語での研究発表やディスカッション力を向上し、国際的な研究遂行力を培った。
9.Taipei Medical University 国際交流プログラム ボランティア	2014年8月	大阪大学保健学科にて1か月間実施されたTaipei Medical Universityとの国際交流プログラムにおいて、施設見学や大学講義全般における案内・通訳などのボランティアを担当した。国際交流におけるコミュニケーションや相互理解の重要性・実際を学び、国際的な視野と多様な価値観への柔軟な対応力を培った。
10.Comprehensive Systematic Review Training Program (CSRTP)受講	2014年7月	Joanna Briggs Institute (JBI)認定のシステマティックレビュー講習会の受講を行い、質的研究のシステマティックレビュー作成プロセス、国際標準の文献検索・分析スキルを体系的に学習した。
11.The Japan Centre for Evidence Based Practice (JCEBP)事務局 ボランティア	2014年4月2015年3月	Joanna Briggs Institute (JBI)の日本提携事務局である、The Japan Centre for Evidence Based Practice (JCEBP)事務局においてシステマティックレビューの翻訳作業者や、事務業務にボランティアとして従事。エビデンスに基づく看護の実践を支える情報発信に携わり、理解を深めた。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
2 学位論文				
1.工学的技術を用いた情報・症状の可視化について、技術活用に向けた看護の立場からの検討 －手術室看護記録の音声入力支援技術と主観的な症状を数値化する技術に着目し て－	単	2022年9月	国立大学法人大阪大学大学院医学系研究科，博士（保健学）	これまで客観的に捉えにくかった情報・症状の可視化を目指し、工学技術の看護現場への実装可能性を検討した。主に、①音声認識技術による看護記録の作成、②皮膚感覚評価装置を用いた転倒リスク評価について基礎的な検討を行った。①では発話と記録の表現の違いが課題であり、用語の辞書の整理が必要であることが示唆された。②では感覚評価装置の計測結果に中等度の被験者内再現性が認められ、計測手法としての妥当性が示唆された。
2.日本の精神科病院における転倒・転落インシデントのパターン：12年間のインシデントレポートの量的・質的分析	単	2016年3月	国立大学法人大阪大学大学院医学系研究科，修士（保健学）	精神科患者は向精神薬の影響で転倒リスクが高い。そこで、精神科病院における12年間の転倒インシデントを解析し、報告件数の経年変化と年代別の転倒要因を検討した。軽度の転倒の報告は、病院の医療安全対策の実施と関連する可能性が示唆された。年代別の分析では、65歳未満の者は精神症状の変化や処方の変更が転倒リスクと関わることが示唆された。また、65歳以上の者ではケアが重なる時間帯に転倒が多く発生し、ケア集中時の人員配置が課題となることが示唆された。
3 学術論文				
1.Differences in the circadian rhythm of heart rate between nurses engaged in rotating night shift work and those in day-only	共	2025年12月	Biological Rhythm Research, 1-17	【著者】Nobue Arimoto, Chieko Tan, Tomoya Tamei, Rie Tajika, Takako Yoshimi, Haruna Fukushige, Sayaka Suga, Tatsuro Ishida, Atsue Ishii, Hideyuki Shiotani 看護師の交代制夜勤が心拍数の概日リズムに与える影響を検討した。ウェアラブルデバイスで約3か月間心拍数を連続測定し、日勤のみ群と比較した結果、交代制夜勤群では心拍数の概日リズムのピーク位相の遅延と個人内変動性の増大が認められた。これより、交代制夜勤は生理的リズムの乱れに影響する可能性が示された。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
work: A three-month monitoring study				
2.Factors Influencing the Skin Sensation of the Index Finger in Older People: Impact of Antihypertensive Medications	共	2025年8月	Studies in Health Technology and Informatics. 2025 Aug 7;329: 1740-1741. doi: 10.3233/ SHTI251191	【著者】Sayaka Suga, Shinichi Yoshimura, Yuko Ohono 皮膚感覚は神経系・筋骨格系を介してバランスの維持に関わることから、転倒リスクに影響を与える。そこで、指先の皮膚感覚に影響を与える要因を調査した。その結果、降圧剤の内服が皮膚感覚閾値を有意に低下させ、感度を高める可能性が示された。このことより、高血圧に対して適切な治療を行うことが、皮膚感覚閾値にも影響を与える可能性が示唆された。
3.Novel orthotopic patient-derived xenograft model using human pancreatic cancer tissue fragments to recapitulate distant metastasis and cancer-related hypercoagulability（査読付）	共	2025年3月	Medical Molecular Morphology, 2025	【著者】Takuma Miura, Arisa Watanabe, Mutsumi Miyake, Sayaka Suga, Makoto Miyoshi, Kumiko Miyashita, Shohei Komatsu, Noriyuki Nishimura, Kazuya Shimizu, Yuichi Hori 膵臓癌は早期から遠隔臓器に転移する悪性腫瘍であるが、早期の転移を再現できる動物モデルは乏しい。そこで、がん微小環境を保持したまま腫瘍組織を膵臓に移植するモデルを開発した。このモデルは、早期転移、神経浸潤、血液凝固能亢進が再現され、従来のモデルより臨床に近い病態が示された。
4.Association between maximum lifetime body mass index and nail fold capillary changes in patients with type 2 diabetes mellitus（査読付）	共	2024年12月	Cureus, 16(12)	【著者】Maiko Shikama, Sayaka Suga, Tetsuya Tajima, Junji Kozawa, Norikazu Maeda, Michio Otsuki, Taka-Aki Matsuoka, Iichiro Shimomura, Yuko Ohno 2型糖尿病患者の生涯最大のBMIと微小血管変化（爪郭部毛細血管の捻転）の関連を検討した。その結果、捻転割合は生涯の最大BMIと有意に関連していた一方、調査時のBMIとは関連していなかった。2型糖尿病とその合併症予防には生涯にわたる体重管理が重要であることが示唆された。
5.Messages Nurses Understand When Communicating with Mechanically Ventilated Patients in Critical Care: A Video-Based Descriptive Observational Study（査読付）	共	2024年10月	Health Communication Research, 15(2), 18-35	【著者】Akiko Yamaguchi, Atsue Ishii, Haruna Fukushige, Izumi Akada, Rie Mitani, Akiko Ito, Sayaka Suga, Akihito Nakajima, Akiko Yamada, Yoko Arima 人工呼吸器装着患者とのコミュニケーションでは、看護師が患者のメッセージに気付くことが重要である。そこで、看護師が患者のメッセージを理解するまでの時間と内容の実態を調査した。理解に要した時間は最短4秒、最長195秒であり、症状の訴えは迅速に理解される一方、個人的な希望の理解には時間を要した。
6.Validity of Computer-Controlled Skin Sensation Threshold Measurements and Relationship to Balance in Older People（査読付）	共	2024年7月	Studies in Health Technology and Informatics. 2024 Jul 24;315: 740-741. doi: 10.3233/ SHTI240307	【著者】Sayaka Suga, Shinichi Yoshimura, Yuko Ohono 転倒は高齢者にとって重要な健康課題である。皮膚感覚が神経系・筋骨格系を介してバランスの維持に関わることから、高齢者105名を対象に、皮膚感覚とバランスの関連を検討した。その結果、皮膚感覚閾値とバランスに有意な関連を認め、皮膚感覚が転倒の有意な指標となる可能性が示唆された。
7.5.Effect of Wiping Pressure on Body Hygiene of Bed Bath with a Wet Washcloth（査読付）	共	2023年3月	Bulletin of Health Sciences Kobe, 2022, 38, 45-56	【著者】Sayaka Suga, Atsue Ishii, Yoshitaka Nakanishi 清拭は皮膚の清潔を保つために重要な技術である。そこで、拭き取り圧と皮膚の衛生状態の関係を検討した。清拭圧は感圧フィルムシートを用いて測定し、皮膚の衛生状態はアデノシン三リン酸衛生モニタリング試験（RLU: relative light units）を指標とした。その結果、清拭によるRLUの低下と清拭圧に関連は認めず、拭き取り圧の強さは皮膚の衛生の保持に必ずしも影響しない可能性が示唆され

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
				た。
8.Discrepancy between the Image Held by Nursing Students of Themselves as Employed Nurses during the Pre-Employment Period and the Post-Employment Reality Faced by Novice Nurses（査読付）	共	2022年12月	Health, 2022, 14, 1244-1266	【著者】Izumi Akada, Atsue Ishii, Akiko Yamaguchi, Haruna Fukushige, Rie Mitani, Akiko Ito, Akihito Nakajima, Sayaka Suga 新人看護師のリアリティショック軽減を目的に、看護学生の就職後のイメージと実情の違いを調査した。看護学生8名と看護師10名へのインタビューから、就職後の生活、仕事への適応、職場への適応、キャリア基盤の構築の4つのカテゴリーにおいて、看護学生は就職後の具体的なイメージが不足しており、教育段階での支援が必要であることが明らかとなった。
9.Opportunities for Interactive Communication in Mechanically Ventilated Critically Ill Patients: A Video-Based Observational Study（査読付）	共	2022年7月	Nursing Research and Practice, 2022, ArticleID 1885938, 1-11	【著者】Akiko Yamaguchi, Atsue Ishii, Haruna Fukushige, Yoshiaki Inoue, Izumi Akada, Rie Mitani, Akiko Ito, Mio Hosona, Sayaka Suga, Akiko Yamada, Yoko Arima 人工呼吸器装着患者は不調を十分伝えにくい状況にある。そこで、コミュニケーション機会の実態を調査した。看護師が会話域に滞在した時間は280分であり、双方向コミュニケーションは78分であった。患者は上肢・下肢・頭部を用いた意図的な行動で発信しており、看護師はその行動に気付くことの重要性が示された。
10.Can nursing records be generated from a nurse’s spoken words during surgery? - A basic study on generating accurate nursing records -（査読付）	共	2021年8月	Japanese Journal of Applied IT Healthcare, 2021, 16(1), 13-20	【著者】Sayaka Suga, Yuko Ohno, Mayumi Nagayasu, Makoto Fujii, Natsumiko Ando, Takako Fujimaki, Haruka Kudo, Anna Tsutsui, Tetsuya Tajima, Haruka Shimizu, Makoto Yamamoto, Ritsuko Saito, Satoshi Nakatani 音声認識技術の看護記録作成支援への応用が期待される中、発話と記録で用いられる表現の違いが課題となる。そこで、その実態を調査した結果、発話と記録で同じ表現が使用されていたのは26.2%であり、63.2%は意味的に類似する別の表現が使用されていた。
11.Association of abdominal obesity with crossing capillaries in the finger nailfold in type 2 diabetes mellitus（査読付）	共	2021年7月	Diabetology International, 2021, 12 (3), 260-267	【著者】Maiko Shikama, Nao Sonoda, Akiko Morimoto, Sayaka Suga, Tetsuya Tajima, Junji Kozawa, Norikazu Maeda, Michio Otsuki, TakaAki Matsuoka, Iichiro Shimomura, Yuko Ohno 2型糖尿病患者123名を対象に、爪郭部毛細血管の捻転と腹部肥満の関連を検討した。その結果、腹部肥満を有する者は捻転割合が高いことが示され、腹部肥満が初期の細小血管障害の重要な因子であることが示唆された。
12.Association of crossing capillaries in the finger nailfold with diabetic retinopathy in type 2 diabetes mellitus, Journal of Diabetes Investigation（査読付）	共	2021年6月	Journal of Diabetes Investigation, 2021, 12(6), 1007-1014	【著者】Maiko Shikama, Nao Sonoda, Akiko Morimoto, Sayaka Suga, Tetsuya Tajima, Junji Kozawa, Norikazu Maeda, Michio Otsuki, Taka-Aki Matsuoka, Iichiro Shimomura, Yuko Ohno 爪郭部毛細血管の捻転は、細小血管障害の形態学的異常の指標となる。2型糖尿病患者126名を対象に爪郭部毛細血管の捻転割合と糖尿病網膜症の関連を検討した結果、捻転割合の高さは糖尿病網膜症の有無と関連することが示された。
13.Differences in the risk of severe falls between patients aged 65 years and patients aged 65 years at a psychiatric hospital based on	共	2021年1月	Perspectives in Psychiatric Care, 2021, 57 (1), 311-317	【著者】Sayaka Suga, Chie Tanimoto, So Yayama, Shunji Suto, Kei Matoba, Toshinobu Sugikado, Kiyoko Makimoto 精神科患者は向精神薬の影響で転倒リスクが高い。そこで、12年間の転倒インシデントを解析した結果、65歳未満の者では約8割が統合失調症を有しており、不安定な精神症状や薬剤調整などが転倒リスクに関連している可能性が示唆された。一方、65歳以上の者では約8割が認知症を有しており、ADLの低下が転倒リスクに関連している可能性が示唆された。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
12‐year incident reports（査読付）				
14.Plantar Tactile Sensation for Young Females with Hiesho（査読付）	共	2020年3月	IEEE, 2020 IEEE 2nd Global Conference on Life Sciences and Technologies (LifeTech), 2020, 329-330 DOI: 10.1109/ LifeTech48969. 2020.1570616124	【著者】Tianyi Wang, Masayuki Endo, Haruka Uehara, Sayaka Suga, Masayo Matsuzaki, Goji Nakamoto, Yuko Ohno 冷却刺激により足底の感覚が低下することで、立位バランスが不安定となることが示されている。そこで、冷え性による足底の冷感が立位バランスに与える影響を検討することを目指して、冷え性と足底感覚の関連を検討した。その結果、冷え性の者は有意に感覚閾値が高いことが示された。
15.Validation of Eurolung risk models in a Japanese population: a retrospective single-centre analysis of 612 cases（査読付）		2019年11月	nteractive CardioVascular and Thoracic Surgery, 2019, 29 (5), 722-728	【著者】Akihiro Nagoya, Ryu Kanzaki, Takashi Kanou, Naoko Ose, Soichiro Funaki, Masato Minami, Yasushi Shintani, Anna Tsutsui, Sayaka Suga, Tetsuya Tajima, Yuko Ohno, Meinoshin Okumura 694名の肺がん患者を対象に、Eurolungリスクモデルによる心肺合併症の罹患率・死亡率の予測精度を検討した。Eurolungリスクモデルは5年生存率と有意に関連しており、長期的な予後予測に有用である可能性が示唆された。
その他				
１．学会ゲストスピーカー				
２．学会発表				
1.「特定の周波数の振動が体性感覚、嗅覚の認知に影響する」「嗅覚刺激が体性感覚、認知反応に影響する」などの発見について	共	2025年8月	第24回日本VR医学会学術大会	【著者】外池光雄，吉村眞一，矢野忠，古川龍三，大野ゆう子，菅彩香，曽智，田村かおり，Jeong Hieyong，坂上友介，梅田雅宏，永田宏子，種村麻里，越野八重美，寺田昌史，草川祐生，A JISAIHAN 嗅覚・体性感覚・認知機能・自律神経系等、ひとの感覚と脳機能に関する実験の研究活動の報告を行った。特に、「特定の周波数の振動が、体性感覚・嗅覚の認知反応を明確にする可能性」「嗅覚刺激が体性感覚、認知機能に影響する可能性」「体性感覚・嗅覚が自律神経の反応に影響を与える可能性」について報告した。
2.高齢者の示指の皮膚感覚に影響を与える要因の検討：降圧剤の影響 －転倒予防への貢献を目指して－	共	2025年6月	日本老年看護学会第30回学術集会	【著者】菅彩香，吉村眞一，大野ゆう子 皮膚感覚は神経系・筋骨格系を介してバランスの維持に関わることから、転倒リスクに影響を与える。そこで、指先の皮膚感覚に影響を与える要因を調査した。その結果、降圧剤の内服が皮膚感覚閾値を有意に低下させ、感度を高める可能性が示された。このことより、高血圧に対して適切な治療を行うことが、皮膚感覚閾値にも影響を与える可能性が示唆された。
3.高齢者と若年者との認知反応時間の比較～パイロットスタディ～	共	2024年10月	第83回日本公衆衛生学会総会	【著者】森田理香，大野ゆう子，杉本七彩，福嶋美希，圓花杏映，清水祐那，若林くるみ，アジサイハン，種村麻里，菅彩香，古川龍三，吉村眞一，遠藤誠之，外池光雄 皮膚感覚の反応は加齢に伴い、遅くなると考えられる。そこで、感覚評価装置を用いて高齢者と若年者の足底刺激に対する反応時間を比較した。その結果高齢者は若年者より有意に反応が遅いことが明らかとなった。
4.高齢者における足底感度と転倒経験、筋力・筋肉量等指標との関係～パイロットスタディ～	共	2024年10月	第83回日本公衆衛生学会総会	【著者】圓花杏映，大野ゆう子，清水祐那，若林くるみ，森田理香，福嶋美希，杉本七彩，アジサイハン，安永真弓，樋口優子，磯貝尚秀，菅彩香，古川龍三，吉村眞一，遠藤誠之，外池光雄 皮膚感覚は神経系・筋骨格系を介してバランスの維持に関わることから、転倒リスクに影響を与える。足底感覚と筋力・体組成・転倒歴の関連を検討した結果、足底感覚は筋力や体組成と異なるクラスターを構成することが示された。
5.What Skills Are Required for Handoffs between Nurses? A Scoping	共	2024年3月	The 27th East Asian Forum of Nursing Scholars Conference	【著者】Mitani Rie, Ishii Atsue, Ito Akiko, Akiko Yamaguchi, Fukushige Haruna, Suga Sayaka, Nakahashi Mitsuyo, Nakajima Akihito, Katsuyama Azusa, Tajika Rie, Arimoto Nobue, Yoshimi Takako, Chushu Chen

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
Review				シフト間のハンドオフはケアの継続・患者安全において不可欠である。ハンドオフに必要なスキルと関連研究を明らかにするため、スコーピングレビューを実施した。その結果、コミュニケーション、臨床判断、情報整理、関係調整などが必要なスキルに含まれることが示された。
6.Nurses’ and nursing students’ cue recognition and utilization in clinical reasoning and judgment: A scoping review	共	2024年3月	The 27th East Asian Forum of Nursing Scholars Conference	【著者】Ito Akiko, Ishii Atsue, Mitani Rie, Nakahashi Mitsuyo, Akiko Yamaguchi, Fukushige Haruna, Suga Sayaka, Nakajima Akihito, Katsuyama Azusa, Arimoto Nobue, Tajika Rie, Yoshimi Takako, Chushu Chen 臨床では、適切な手がかりを解釈して的確な判断を下すことが重要である。臨床で看護師がどのような手がかりを活用しているかを明らかにするため、スコーピングレビューを行った。その結果、生理学的指標、視覚・聴覚・触覚などが手がかりとなることが示された。
7.医療現場において看護職が実施する製品等のモニター評価に関わる業務の実態・求められるスキルに関するインタビュー調査	共	2023年6月	第11回看護理工学会学術集会	【著者】菅彩香，石井豊恵，森山英樹，内田智子，二瓶美里 患者の療養生活・日常生活を支援するため、医療福祉機器開発の活用・導入に向けたモニター評価は重要である。そこで、看護職におけるモニター評価に関わる業務の実態と求められるスキルを調査した。その結果、業務には情報収集や製品選定が含まれ、製品理解・患者理解に基づくアセスメント力や、関係者との調整力、説明力が求められていた。
8.2型糖尿病患者における眼科未受診者の特性　糖尿病網膜症の有無別の検討	共	2023年3月	第93回日本衛生学会学術総会	【著者】色摩茉衣子，菅彩香，田嶋哲也，小澤純二，前田法一，大月道夫，松岡孝昭，下村伊一郎，大野ゆう子 糖尿病網膜症による失明を予防するためには、眼科受診が欠かせない。そこで、2型糖尿病患者における、眼科未受診患者の特性を網膜症の有無別に検討した。その結果、網膜症のない未受診者は若年、罹病期間が短い、肥満傾向であった。網膜症のある未受診者は糖尿病の家族歴がなく、罹病期間が長かった。眼科未受診者の特徴は網膜症の有無で異なった。
9.Association Between Maximum Lifetime Body Mass Index, Body Mass Index at Survey, and Crossing Capillaries in the Finger Nailfold in Type 2 Diabetes Mellitus	共	2023年2月	The 16th International Conference on Advanced Technologies & Treates for Diabetes	【著者】Maiko Shikama, Sayaka Suga, Tetsuya Tajima, Junji Kozawa, Norikazu Maeda, Michio Otsuki, Taka-Aki Matsuoka, Iichiro Shimomura, Yuko Ohno 2型糖尿病患者123名を対象に、爪郭部毛細血管の捻転と腹部肥満の関連を検討した。その結果、腹部肥満を有する者は捻転割合が高いことが示され、腹部肥満が初期の細小血管障害の重要な因子であることが示唆された。
10.ナースコール発報数に影響を与える患者要因の検証 -重症度に着目して-	共	2022年10月	第10回看護理工学会学術集会	【著者】松本唯，福重春菜，石井豊恵，井上文彰，仲島圭将，菅彩香，眞壁幸子，谷浦葉子，岩崎朋之 重症度がナースコール発報数に与える影響を検討した。重症度の指標には、救護度（担送・護送・独歩）と観察の程度（1時間に1回以上、1日4回以上、1日3回以下の3区分）を用いた。その結果、1人の患者が1日に発報するナースコール数は担送が最も多かった。観察の程度は1時間に1回以上の観察が最も多かった。援助の必要性が高いほどナースコール発報数が多いことが示唆された。
11.ナースコール発報数に影響を与える患者要因の検証 -認知・認識力に着目して-	共	2022年10月	第10回看護理工学会学術集会	【著者】眞壁幸子，福重春菜，石井豊恵，井上文彰，仲島圭将，菅彩香，松本唯，谷浦葉子，岩崎朋之 認知・認識力がナースコール発報数に与える影響を検討した。分析には認知・認識力スコア（0－9点）を使用し、0点は認知・認識力低下なし、9点は最も重症であることを示す。ナースコール発報数0点で最小、6点で最大であり、0点から6点にかけて単調に増加していた。
12.ナースコール発報数に影響を与える患者要因の検証 -年齢に着目して-	共	2022年10月	第10回看護理工学会学術集会	【著者】福重春菜，石井豊恵，井上文彰，仲島圭将，菅彩香，谷浦葉子，岩崎朋之 年齢がナースコール発報数に与える影響を検討した。ナースコール発報数は年齢が上昇すると増加する傾向にあり、特に70代以降でその傾向が強かった。

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
13.同一被験者における手掌及び足底の皮膚感覚閾値の再現性に関する研究	共	2022年10月	第10回看護理工学会学術集会	【著者】菅彩香，吉村眞一，安藤菜摘子，永安真弓，大野ゆう子 皮膚感覚は神経系・筋骨格系を介してバランスの維持に関わることから、転倒リスクに影響を与える。そこで、皮膚感覚の簡易評価指標の確立を目指し、感覚評価装置を用いた皮膚感覚の評価の妥当性を検討した。健常成人を対象として繰り返し計測を行い、中等度の被験者内再現性を認めた。感覚評価装置は有用な計測手法である可能性が示唆された。
14.Feasibility of screening tests on the palm using a computerized quantitative skin sensation evaluation device	共	2022年4月	The 25TH East Asian Forum of Nursing Scholars Conference	【著者】Sayaka Suga, Shinichi Yoshimura, Natsumiko Ando, Mayumi Nagayasu, Yuko Ohno 皮膚感覚は神経系・筋骨格系を介してバランスの維持に関わることから、転倒リスクに影響を与える。そこで、皮膚感覚の簡易評価指標の確立を目指して、健常成人30名を対象に手掌と足底の皮膚感覚閾値の関係を検討した。皮膚感覚閾値は、手掌の方がより小さく、手掌と足底で中等度の相関関係を認めることが明らかとなった。これは、手掌の皮膚感覚閾値を四肢の皮膚感覚の代表値とできる可能性を示唆している。
15.Characteristics of scenes in which mechanically ventilated critically ill patients actively communicate: Video-based descriptive observational study	共	2022年3月	The 49th Annual Meeting of the Japanese Society of Intensive Care Medicine	【著者】Akiko Yamaguchi, Haruna Fukushige, Atsue Ishii, Sayaka Suga, Yoshiaki Inoue, Izumi Akada, Rie Mitani, Akiko Ito, Akihito Nakajima, Manabu Ono, Akiko Yamada, Yoko Arima, Cyusyu Chin 人工呼吸器装着患者とのコミュニケーションでは、看護師が患者のメッセージに気付くことが重要である。そこで、コミュニケーション場面の実際を調査した。その結果、身体症状は比較的短時間で理解されたが、個別的な内容は理解に時間を要することが明らかとなった。
16.Association of crossing capillaries in the finger nailfold with diabetic nephropathy in type 2 diabetes mellitus	共	2021年10月	The 11th International Congress of Diabetes and Metabolism and The 13th AASD Scientific Meeting	【著者】Maiko Shikama, Sayaka Suga, Tetsuya Tajima, Junji Kozawa, Norikazu Maeda, Michio Otsuki, Taka-Aki Matsuoka, Iichiro Shimomura, Yuko Ohno 爪郭部毛細血管の捻転は、細小血管障害の形態学的異常の指標となる。2型糖尿病患者126名を対象に爪郭部毛細血管の捻転割合と糖尿病腎症の関連を検討した結果、捻転割合の高さは糖尿病腎症の有無と関連することが示された。
17.意識下人工呼吸器装着患者の症状マネジメントのためのコミュニケーション方法	共	2021年2月	第48回日本集中治療医学会学術集会	【著者】山口亜希子，福重春菜，石井豊恵，細名水生，菅彩香，井上文彰，赤田いづみ，三谷理恵，伊藤朗子，中嶋章仁，大野学，川名裕治，山田聡子，有馬洋子 人工呼吸器装着患者は不調を十分伝えにくい状況にある。そこで、コミュニケーションの実態を調査した。患者が伝えた症状は、痛み、呼吸苦、体位、口渇、体温であり、ジェスチャー、口唇術、ナースコールなどで看護師に合図を送っていた。看護師はその合図を見逃さず、丁寧に症状を聴き取ることが重要である。
18.看護現場へのAIの活用ビッグデータを看護にどう活用するか	共	2020年12月	第51回日本看護学会学術集会	【著者】大野ゆう子，菅彩香，安藤菜摘子，筒井杏奈 看護現場の問題意識をAIを活用することで解決出来ないかとの視点から、患者の状態把握・看護記録の作成支援・保健医療体制の分析の3つの取り組みを例に、現状と課題について発表を行った。
19.2型糖尿病患者における腹部肥満と爪郭部毛細血管の捻転との関連	共	2020年12月	第5回日本糖尿病・生活習慣病ヒューマンデータ学会	【著者】色摩茉衣子，園田奈央，森本明子，菅彩香，田嶋哲也，小澤純二，前田法一，大月道夫，松岡孝昭，下村伊一郎，大野ゆう子 2型糖尿病患者123名を対象に、爪郭部毛細血管の捻転と腹部肥満の関連を検討した。その結果、腹部肥満を有する者は捻転割合が高いことが示され、腹部肥満が初期の細小血管障害の重要な因子であることが示唆された。
20.2型糖尿病患者における爪郭部毛細血管の捻転と糖尿病網膜症との関連	共	2020年10月	第57回日本糖尿病学会近畿地方会	【著者】色摩茉衣子，園田奈央，森本明子，菅彩香，田嶋哲也，小澤純二，前田法一，大月道夫，松岡孝昭，下村伊一郎，大野ゆう子 爪郭部毛細血管の捻転は、細小血管障害の形態学的異常の指標となる。2型糖尿病患者126名を対象に爪郭部毛細血管の捻転割合と糖尿病網膜症の関連を検討した結果、捻転割合の高さは糖尿病網膜症の

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
				有無と関連することが示された。
21.ナースコール発報数が多い患者が病棟全体の発報規則に及ぼす影響の検証	共	2020年10月	第8回看護理工学会学術集会	【著者】福重春奈，石井豊恵，井上文彰，山口亜希子，細名水生，菅彩香，伊藤朗子，ウィリアムソン彰子，谷浦葉子，中島圭将 周波数解析を用いて、ナースコールの発報数が多い患者が病棟全体の発報規則に与える影響を検討した。発報数の多い患者を除いて解析すると、7日周期が明確になったことから、発報数の多い患者が病棟全体の発報規則を見えにくくしている可能性が示唆された。
22.アンプルカット動作における指先軌道について	共	2020年10月	第8回看護理工学会学術集会	【著者】平野方子，石井豊恵，井上文彰，越野八重美，岡田志麻，中嶋章仁，福重春菜，山口亜希子，大野学，菅彩香 アンプルカットによる受傷につながる動作要因を特定し、教育に活かすことを目的に、モーションキャプチャシステムを用いて、アンプルカット時の手指の軌道を評価した。その結果、経験者は左右の指の軌道に交差はなかったが、受傷者は左右の指が接近していることが明らかとなった。
23.Differences in the risk of falls between individuals (65 years-old and 65 years-old at a psychiatric hospital in Japan)	共	2020年2月	The 6th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science (The 6th WANS)	【著者】Sayaka Suga, Chie Tanimoto, So Yayama, Shunji Suto, Kei Matoba, Toshinobu Sugikado, Kiyoko Makimoto 精神科患者は向精神薬の影響で転倒リスクが高い。そこで、12年間の転倒インシデントを解析し年代別の転倒要因を分析した。65歳未満の者の約8割が統合失調症を有し、精神症状の変化や処方の変更が転倒リスクと関わっていた。また、65歳以上の者の約8割が認知症を有し、ADLの低下の影響により転倒していた。
24.Development of speech-to-text system for real-time nursing record in operating room : A preliminary study	共	2020年1月	The 23rd East Asian Forum of Nursing Scholars (The 23rd EAFONS)	【著者】Natsumiko Ando, Mayumi Nagayasu, Takako Fujimaki, Tetsuya Tajima, Sayaka Suga, Haruka Kudo, Anna Tsutsui, Maiko Shikama, Makoto Fujii, Hieyong Jeong, Yuko Ohno 音声認識技術の看護記録作成支援への応用が期待されるが、雑音と音声の分離が課題となる。そこで、手術室で発生する音の特性を調査し、金属音と女性の声が同じ周波数帯にあることや、超音波伝導の作動音と男性の声が同じ周波数帯にあることが明らかとなった。
25.若年女性の冷え性と足底感覚の検討	共	2019年12月	第11回多感覚研究会	【著者】Wang Tianyi，上原陽香，遠藤誠之，山田真央，松崎政代，中本剛二，菅彩香，大野ゆう子 冷却刺激により足底の感覚が低下することで、立位バランスが不安定となることが示されている。そこで、冷え性による足底の冷感が立位バランスに与える影響を検討することを目指して、冷え性と足底感覚の関連を検討した。その結果、冷え性の者は有意に感覚閾値が高いことが示された。
26.手術室看護記録の音声入力支援に関する基礎的検討　1 周術期看護分野での音声入力変換のための辞書つくり	共	2019年9月	日本行動計量学会第47回大会	【著者】菅彩香，大野ゆう子，永安真弓，安藤菜摘子，藤牧貴子，工藤榛香，筒井杏奈，木戸倫子，Jeong Hieyong AI技術の導入による医療従事者の負担軽減が期待される。その一環として、音声認識技術の看護記録作成支援への応用が期待されるが、発話と記録で用いられる表現の違いが課題となる。そこで、その実態を調査した結果、発話と記録で同一表現が使用されていたのは26.2%であり、63.2%は意味的に類似する別の表現が使用されていた。
27.手術室看護記録の音声入力支援に関する基礎的検討　2 個別マイクと定点マイクの雑音ののりかたの比較	共	2019年9月	日本行動計量学会第47回大会	【著者】安藤菜摘子，大野ゆう子，永安真弓，藤牧貴子，菅彩香，工藤榛香，筒井杏奈，田嶋哲也，木戸倫子，Jeong Hieyong AI技術の導入による医療従事者の負担軽減が期待される。その一環として、音声認識技術の看護記録作成支援への応用が期待されるが、雑音と音声の分離が課題となる。そこで、手術室で発生する音の特性を調査し、金属音と女性の声が同じ周波数帯にあることや、超音波伝導雌の作動音と男性の声が同じ周波数帯にあることが明らかとなった。
28.Long-term trend of medication errors in a Japanese psychiatric hospital	共	2015年10月	The 4th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science (The 4th WANS)	【著者】Kei Matoba, So Yayama, Chie Tanimoto, Tomomi Kajiwara, Masue Inoue, Sayaka Suga, Shunji Suto, Yoshimi Endo, Miyae Yamakawa, Kiyoko Makimoto 精神科疾患の治療に薬物療法は重要である。そこで、精神科病院の12年間のインシデントレポートを分析し、投薬過誤の現状を分析した。その結果、投薬過誤の約70%が投薬間違いであり、18時に多発していた。また、配置スタッフの増減に伴いインシデント報告件数も

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
２．学会発表				
				変動しており、人員配置が投薬過誤に影響していた。
29. Analysis of incident reports of absconding behavior at a Japanese psychiatric hospital over a 12-year period	共	2015年10月	The 4th International Nursing Research Conference of World Academy of Nursing Science (The 4th WANS)	Tomomi Kajiwara, So Yayama, Chie Tanimoto, Kei Matoba, Sayaka Suga, Masue Inoue, Shunji Suto, Yoshimi Endo, Miyae Yamakawa, Kiyoko Makimoto 精神科病棟からの患者の離棟は重大な転機に繋がるため、精神科病院の12年間のインシデントレポートを分析し、離棟に繋がる要因を分析した。離棟の要因の約6割は、看護手順の遵守ミスや不十分なアセスメントなど、看護者要因によるものであった。
30. The pattern of fall incidents at a psychiatric hospital in Japan: a quantitative analysis of incident reports, 2001-2012	共	2015年10月	The 10th International Association of Gerontology and Geriatrics (IAGG) - ASIA/ OCEANIA 2015 Congress (IAGG ASIA/ OCEANIA 2015)	【著者】Sayaka Suga, Chie Tanimoto, So Yayama, Kei Matoba, Miyae Yamakawa, Kiyoko Makimoto 精神科患者は向精神薬の影響で転倒リスクが高い。そこで、12年間の転倒インシデントを解析し経年的な特徴を検討した。軽度の転倒の報告は医療安全対策の実施に伴い増減したが、重度の転倒の報告件数は明確な変動は認めなかった。このことは、軽度の転倒インシデントは適切な対策を行うことで予防につながることを示唆している。
31. 蒸しタオル清拭における清拭圧の違いが清拭後皮膚に残る汚れに及ぼす影響	共	2014年10月	第2回看護理工学学会学術集会	【著者】菅彩香，石井豊恵，中西義孝 清拭は皮膚の清潔を保つために重要な技術である。そこで、拭き取り圧と皮膚の衛生状態の関係を検討した。清拭圧は感圧フィルムシートを用いて測定し、皮膚の衛生状態はアデノシン三リン酸衛生モニタリング試験（RLU: relative light units）を指標とした。その結果、清拭によるRLUの低下と清拭圧に関連は認められず、清拭による皮膚の衛生の保持には、拭き取り圧の強さは必ずしも影響しない可能性が示唆された。
32. 若年認知症患者に対する家族介護者の日常的なケアにおける基本的な関わり-グループインタビューの質的研究-	共	2014年9月	一般社団法人日本認知症ケア学会 2014年度関西地域大会	【著者】菅彩香，山川みやえ，竹内志穂，師井佳奈子，樋上容子，牧本清子 若年性認知症に特化したサービスは少なく、家族介護者が主に介護を担っている。家族介護者が日常的に行っているケアの工夫を明らかにするためインタビュー調査を行った。その結果、「本人が実施しやすいように整える」などの残存機能を活かす関わりや、介護者自身のストレスをコントロールする工夫が行われていることが示された。
33. 若年性認知症者の行動心理学的兆候に対して家族介護者が行う対処行動 -グループインタビューの質的分析結果-	共	2014年9月	一般社団法人日本認知症ケア学会 2014年度関西地域大会	【著者】師井佳奈子，山川みやえ，竹内志穂，菅彩香，樋上容子，牧本清子 若年性認知症患者は認知症の周辺症状（BPSD)により介護者の負担が大きい。BPSDに着目し、家族介護者の対処行動を明らかにするためインタビュー調査を行った。＜身体的なしんどさ＞＜思い通りにできないこと＞などが「易怒性」の要因となっていた。それに対して＜楽しみを与える関わり＞＜安心感を与える関わり＞＜朝の機嫌を良くする関わり＞＜他の家族との協力＞などの工夫を行っていた。
34. 若年性認知症の日常的ケア支援データベースシステムの開発	共	2014年9月	一般社団法人日本認知症ケア学会 2014年度関西地域大会	【著者】山川みやえ，竹内志穂，恩塚浩史，岡村卓哉，樋上容子，菅彩香，師井佳奈子，室谷牧子，周藤俊治 若年性認知症の家族介護者の支援システムの構築を目指して、問題解決型のケアサポートデータベースを作成した。データベースの有用性や問題点を調査した結果、「使いやすい」「自分が聞きたいことが整理できる」など一定のポジティブな反応が得られ、家族支援や病態・症状理解に一定の効果が認められた。
３．総説				
1. マイクロメートルの違いが拓く皮膚感覚と匂いの世界：高精度の足底感覚計の開発と匂いが皮膚感覚に及ぼす影響の検出	共	2023年2月	AROMA RESEARCH, 2023, 24 (1), 7-13	【著者】吉村眞一，菅彩香，アジサイハン，今井菜穂子，植村菜奈，大野ゆう子，遠藤誠之 匂いが脳神経系を刺激することは知られているが、皮膚感覚との関係はこれまであまり注目されてこなかった。その背景には、皮膚感覚を精密に計測できる手法が限られていたことがある。そこで、皮膚感覚を精密に計測できる機器の開発の経緯と現状を紹介し、匂い刺激と皮膚感覚の関係について考察した。
４．芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
4．芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
5．報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1.感覚評価装置を用いた手掌の皮膚感覚と転倒の関連の検討	単	2024年6月	大阪ガスグループ福祉財団　調査・研究報告集,2024, 37, 99-105	【著者】菅彩香, 永安真弓, 安藤菜摘子 高齢者の手掌の皮膚感覚と転倒・バランスとの関連を検討した。65歳以上の者を対象に皮膚感覚閾値や重心動揺などを測定し、転倒経験との関連を多変量解析で分析した。その結果、手掌の皮膚感覚は過去の転倒経験とは関連しなかったが、重心動揺の指標である足圧中心の総軌跡長と有意な関連が認められ、バランス評価への応用可能性が示唆された。
6．研究費の取得状況				
1.生体計測によるロコモティブシンドロームを有する者の運動器の状態の個別性の可視化	単	2025年4月～2029年3月	科学研究費：25K20811 若手研究	菅彩香（代表） ロコモティブシンドローム（ロコモ）は従来筋力から評価されてきた。これまでの研究により皮膚感覚も移動能力の指標となることを示してきた。そこで、高齢者を対象に筋力・皮膚感覚を測定し、ロコモの分類と移動能力・身体活動への影響を検討する。また、評価プロトコールの作成、加齢変化パターンの同定を行い、加齢変化パターンと移動機能との関連分析を行う。これにより、個別性に応じた予測モデルと介入・予防プログラムの構築を目指す。
2.発酵食品の匂いが嗜好と食行動に与える影響の日本とモンゴルの国際比較：脳活動と主観的体験の両面からの分析	共	2025年4月～2026年3月	公益財団法人サッポロ生物科学振興財団 2025年度　研究助成	菅彩香（代表）, A JISAIHAN 発酵食品は健康維持や認知症予防に効果があり、文化や個人差に応じた活用が重要である。本研究では、日本とモンゴルの発酵食品の匂いに対する感受性の違いに注目し、脳活動と主観的体験の両面から、嗜好や食行動への影響を探る。これにより、文化背景や個人差に基づく発酵食品の個別化利用を提案し、異文化間での健康食品普及に貢献することを目指す。
3.高齢者の皮膚感覚機能の個別性を考慮した転倒リスク評価指標の検討	単	2024年10月～2025年9月	一般財団法人ノーリツぬくもり財団 2024年度　研究助成	菅彩香（代表） 転倒は要介護の主因であり、社会的に重要な健康課題である。従来は筋骨格系を中心としたリスク評価が行われてきた。しかし、運動器には神経系も含まれることから、神経系の評価も重要であると考えられる。そこで、神経系の入り口である皮膚感覚に着目し、個人差を考慮した評価プロトコールを確立することで、転倒リスク評価システムの最適化と開発を目指す。
4.手掌の皮膚感覚に着目した糖尿病神経障害、高齢者の転倒リスク評価指標の検討	単	2022年4月～2025年3月	科学研究費：22K17422 若手研究	菅彩香（代表） 糖尿病神経障害や高齢者の転倒による身体損傷は重大な健康課題であり、早期発見・予防のためのスクリーニングが重要である。従来の足底感覚評価には専門的技術が必要で課題があった。そこで、コンピュータ制御による感覚評価装置を用いて、より簡便な手掌での評価法を提案することとした。本研究では手掌と足底の感覚の関係性や感覚閾値の分布、疾患・転倒リスクとの関連を明らかにし、新たなスクリーニング指標としての有用性を検証した。
5.感覚評価装置を用いた手掌の皮膚感覚と転倒の関連の検討	共	2021年4月～2022年3月	大阪ガスグループ福祉財団 高齢者の福祉および健康づくりに関する調査・研究助成	菅彩香（代表）, 永安真弓, 安藤菜摘子 皮膚感覚は神経系・筋骨格系を介してバランスの維持に関わることから、転倒リスクに影響を与える。しかし、既存の転倒リスク評価では感覚面は余り考慮されていない。そこで、コンピュータ制御で皮膚感覚を計測する感覚評価装置を用いた皮膚感覚の簡易評価指標の確立を目指し、手掌感覚と転倒との関連を検討した。
6.せん断刺激を加えることで皮膚感覚を数値化できる感覚評価装置のアルゴリズム開発	共	2020年11月～2021年3月	大阪大学国際医工情報センター MDD Grant2020	菅彩香（代表）, 大野ゆう子 皮膚感覚は加齢や神経疾患による感覚障害の重要な指標であるが、従来のモノフィラメント検査は技量や機器精度に依存し再現性に課題がある。感覚評価装置はコンピュータ制御で自動測定が可能なため、非専門家でも汎用的に使用できる。手掌と足底の感覚閾値を比較し、特に手掌の評価標準化を目指して検討を行った。また、せん断刺激の詳細制御により皮膚感覚の詳細検討と評価アルゴリズムの開発を行った。

学会及び社会における活動等	
年月日	事項
1.2026年2月	査読, BMC Geriatrics
2.2026年1月	査読, BMC Geriatrics

学会及び社会における活動等	
年月日	事項
６．研究費の取得状況	
3.2025年10月	査読，BMC Geriatrics
4.2025年8月	査読，BMC Nursing
5.2022年7月～2023年6月	第11回看護理工学会学術集会　運営委員